

湖で一生をおくるアユ コアユ

琵琶湖内に生息するコアユは川に生息する一般のアユのように大きくなりません。琵琶湖の中で生を過ごし、稚魚の時と同じプランクトンを食べ続けるからです。しかし、コアユを川に移し、普通のアユと同じように石についた藻類を食べさせると、大きく成長します。学者によつては、コアユを普通のアユと同じ種とする人と、別の亜種とする人がいて、まだ答は出ていません。自然にはまだわからないことがいっぱいあるんですね。



コアユ

【監修および写真提供】

琵琶湖の魚、貝
滋賀県立琵琶湖博物館
専門学芸員
前畑 政善氏

淀川の魚、貝
清風学園教諭
関西大学 非常勤講師
紀平 肇氏



貝に卵を産む 天然記念物 イタセンバラ

淀川を代表する魚。9～10月頃になると、メスはお尻から産卵管を出して一枚貝の中に卵を産みつけ、およそ半年後の5月に仔魚が貝から泳ぎ出てきます。琵琶湖に住むタナゴも貝の中に卵を産む習性を持っていますが、どちらも同じコイ科の仲間です。天然記念物に指定されていますが、最近では水質の悪化や、ブラックバスの増加で数が減っており、よりいっそうの保護が求められています。



イタセンバラ

毎年、お祭りの日に放流 セタシジミ

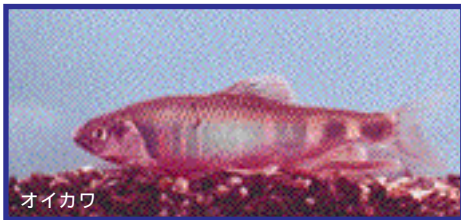
かつては堅田や沖島の岸辺が埋まるほど獲れ、琵琶湖の水産資源を代表する貝のひとつでした。30年くらい前から数が減ってきたため、毎年4月23日を「シジミの日」に定めて、セタシジミを琵琶湖へ放流するセタシジミ祭が行われています。今年で祭も13回目。長年に渡り放流を続けてきたのが実って、最近増加のきざしがみえています。



セタシジミ

産卵期に鮮やかな変身 オイカワ

淀川のワンドはもろろん本流でもとも数多く見られる魚のひとつ。オスはシリビレがとて大きく、産卵期になると青緑色や紅色、黄褐色などの鮮やかな色に染まります。産卵期は初夏から夏で、川の流れのややゆるやかな砂泥地に卵を産みつけます。



オイカワ

大型の二枚貝 オグラヌマガイ

琵琶湖で少し見られる他は、ほぼ淀川だけに生息する流域を代表する貝です。琵琶湖の固有種のメンカラスガイとかがたがよく似ていますが、幼貝の時にちようつがいの「前後」にLのような突起が発達するところが違います。名前は、かつて木津川、桂川、宇治川の三川合流地点の上流にあった巨楕おぐら池にたくさんいたことからこの名がつけられました。



オグラヌマガイ